

長女才蝶が嫁している大洲城に寛文十年後半赴いて医官となつたと考える。大洲には川口良閑の弟門人の鎌田良球（子孫はずっと医を継ぎ、今、産婦人科医）がいて、師良庵と才蝶さん（同じく大洲の徳正寺に嫁した）の面倒を見て呉れたのであらう。

茲に良庵は八巻と別の註記一卷と書いてゐるのに、五巻迄きり存在しない理由であるが、恐らく良庵の先妻の長男宮崎元仲か、又は後妻の長子河口温良庵の何れかが京都で次々と借り受けて写本中に、河口良閑は志州鳥羽城主土井利益（としま）に元和元年（一六八一）に召され更に唐津移封に随行したので、六・七・八巻と別巻一冊は誰かのところに残つてしまい、今日欠本となつてしまつたと考へる。因に元仲は京より伊豆韮山に移り、温良庵か子孫は林雲端となつて、京より越前大野に移つた想われる。

小冊子ながら、内容は色々に豊富である。
（宮城県古河市）

19 『蘭学事始』と『蘭東事始』

片桐 一 男

杉田玄白が執筆して大槻玄沢に託した草稿本の伝存は未詳である。

富山高岡市の長崎家に伝わる古写本『蘭東事始』は、大槻玄沢が師杉田玄白から草稿を託され、手を加えて、『事始』を成稿したとみなされている文化十二年（二八一五）から、わずか五年後の文政三年（一八二〇）九月の筆写本で現存最古の一本である。

浩齋の問い合せに回答した玄沢の書翰や、関係長崎家資料にみられる『蘭学事始』『蘭東事始』関係記事を整理して、現在における書名をめぐる判明点を報告しておきたい。

①文化十四年（一八一七）手録『東遊襍録』の「東都雑事

録」に、

蘭学事始 九幸翁著 写本二冊

②文政三年（一八二〇）八月十九日付長崎浩齋宛大槻玄沢

書翰

杉田翁蘭学事始写させ進め候之様仰せ越され、早

束申し付け、此節出来に付、指し下し申候

③文政三年十月十七日付長崎浩齋宛大槻玄沢書翰

扱、相い託され候蘭学事始御落手成され候而、御悦

び成され、大幸いたし候、御丁寧御謝辞痛却仕り候

④長崎浩齋旧蔵『蘭東吏始』

（外題）蘭^学東^漸吏始 全

（大尾）磐水先生使塾生写之以見寄贈^健

維昔文政三年庚辰九月

（内題）蘭東事始上之卷／（下之卷）

⑤文政四年（一八二二）二月十一日長崎浩齋宛大槻玄沢書

翰

蘭学事始外題ニ蘭東と認置候御疑問、御尤千万奉存

候、何れも拙老命候題目にて御座候、蘭「巳」東と申

意にて、蘭東など共、致試候事にて御座候、覚へ易

き蘭学之方可然やと存候事にて候

⑥弘化四年（一八四七）長崎浩齋追記

原名蘭学吏始 磐水先生去字字

加東字曰蘭東事始之。言蘭学東^健

漸吏始。也。窃按須以六字為名

略称則不可解矣^否

弘化四年丁未四月廿七日長崎剛健謹識

なお、詳細は次の刊行予定の拙著に譲る。

『蘭学、その江戸と北陸——大槻玄沢と長崎浩齋——』

思文閣出版 一九九三年四月刊

（青山学院大学）